

独立野戦照空オ十二中隊部隊略正

年月日	概要
昭和六二一〇	独立照空オ十二中隊の編成下令 北部九十一部隊にて編成
一五	宇品港出帆 釜山に向ふ
一七	釜山港着 再び宇品復帰
二〇	宇品出帆
二三	高雄寄港
二九	マニラ寄港
一九二二	セブ寄港
一〇	モルツカ群島アンボyna分州アンボン島アンボン着
一三	アンボン島リアン地区警備
二〇	終戦により同地附近にて 終戦処理業務並に現地自活
二五	セラム島カマル移駐
三〇	

年月日	概要
昭和（月日不明） 自 天 二 至 三 六 三 大 四 一 六	セラム島マシカ移駐 戦病死 将校 一 兵 四 セラム島アサウデ乗船 紀伊田田上陸 復員完結 正代部隊長名 1. 陸軍大尉 石田 駿（戦病死） 2. 小 関 太四郎

才二軍特設自動車才二十八中队部略正

中隊長 坂倉清志

年月日	概要
昭和六九年	軍令陸甲才三一号に依り、「ジヤロ」スラハヤに於て編成 当時に於ける編成左の如し 将校 四 陸士官 一六 兵 三九 兵補 一四 自動車 貨車 三六 指揮車 一 側車 二

年月日	至 自	概 要
自 六 九 三	至 一 二 三	「スラバヤ」に於て操縦教育、兵補教育を実施す
自 一 三 一	至 五 八 四	「スラバヤ」に於て兵站輸送業務に従事す 兵一名 戦病死
自 一 五 五	至 一 五 五	南部セレベス島に転進す 輝集参編オ五〇五号に依り オニ方面軍司令部（輝オ一部隊オ一輸送隊）より 下士官 九名 兵 十八名 自動車貨車 一三両転入す
自 五 八 五	至 三 一 一	輝オ三号作戦に参加 （主として陣地構築資材輸送揚陸貨物の緊急輸送業務に従事す） 兵補 一名戦病死

年月日	
概 要	昭和四一〇 自 三二 至 八二四 特設自動車才二十八中隊を基幹とする 臨時自動車大隊を編成 茲に中隊長以下全員 自動車全車兩配属し輸送業務に従事す 輝 勢才三号作戦に参加 (主として陣地構築資材輸送糧秣、彈藥の緊急長距離 輸送を実施) 兵補 一名戦死す 征代部隊長名 1. 陸軍大尉 城 倉 清 志

特設自動車第三十中队部隊略証

(通称番号 一〇四六三)

部隊長名 陸軍中尉 片山 虎夫

年月日	概要
昭和六十九年九月	編成地 「ジャワ」島「スラバヤ」 位置 「ジャワ」島「スラバヤ」 「フロレス」島「マルメラ」 「スンバワ」島 部隊略証の概要 「ジャワ」島「スラバヤ」に於て編成 同時に東部「ジャワ」防衛隊長の指揮下に入り 東部「ジャワ」附近の輸送 小「スンバワ」船舶隊長の指揮下に入り

年 月 日	概 要
昭 五 二	帆船に警束し ホスンダ列島附近の海上輸送 「プロレス島」「マルメラ」に到り 「プロレス島」「テモール」島間の局地輸送 参加せる主要作戦の概要 (警備、戦斗、行軍、輸送)
白 六 九	東部「ジャワ」附近に於て 前送用貨物及飛行場建設材料の輸送
白 五 九	ホ「スンダ」列島附近に於て 帆船に依る輸送業務に従事す 終戦より帰還迄の行動の概要 終戦と同時に「スンバワ島」「ピア」附近に集結し 兵補給員(現地人)を解雇し
至 三 八	

年 月 日	概 要
昭 二 五 二	基幹員は自動車オニ十八連隊の指揮に入り スンバワ島の輸送に従事 師団裏結と同時（二十一年二月―四月頃迄）に 搜索オニ十八連隊に復帰し 「スンダワ」島「バタス」に於て乗船 名古屋に上陸復員す 部隊の正任中特異と認めらるゝ事項等 昭和十九年の末頃から 大型船舶輸送不能となりたる為（三十センチハ〇七）に依り 小スンダ海底の輸送に従事せしむ 二十年に入りては帆船も夜間航海の止むなきに至りたり

特設自動車ヲ三十一中隊部隊略正

年月日	概要
昭 元 一 三	(日推定) 軍令陸甲オ 号(不明)により 特設自動車ヲ三十一中隊の編成を命ぜられ 同時中隊長に充当せらる 中隊長「ジャワ」島「スラバヤ」出發(飛行機) 「アンボン」島「アンボン」到着 「ニューギニア」「カイマナ」に到着 同地野砲兵オ五連隊に於て編成に着手 野砲兵オ五連隊に於て編成完結 (編成要員の差出部隊名) オ五師団司令部 歩 十 歩 二十一 野砲 五

年月日	概要
昭 一 九 二 八 六 〇 二 〇 一 九	同時オ五師団長の指揮下に入らしめらる 同時同地警備 （月日推定） 兵備改領のため下士官以下七名 「ジャワ」島「スラバヤ」に派遣す ケイ諸島に前進のため 「カイマナ」出発 （日推定） 将校以下五四名 歩兵オ十一連隊に転属 中隊長は野戦自動車廠附に充当 准尉以下五名

年 月 日	概 要
野砲才五連隊は転屈 此如に於て中隊は解散となる 部隊長名	陸軍大尉 加藤 宇吉

特設自動車才三十二中隊部隊略正

年月日	概要
昭和一九一九	編成裝備並指揮權屈肉係及其の及運の概要 編成完結 於下アル 編成裝備 隊長 一 (大中) 將校 三 (少一准一曹) にて編成 軍医 一 兵技下士官 二 経理 一 下士官兵 五〇 (概数) 兵補 一〇〇 (ジャワ島にて受領) 「アンボン」にて部隊追級中 オ十九軍司令部に転属 (将一、下士官兵五) 自動車一三輛 (編成定数 約四〇輛)

年月日	
概 要	昭 二 〇 四 昭 二 〇 四 隷属 才十九軍司令部直轄 要選 昭南防犯の爲 隊長、兵技、至理下士官 各一 兵六（概要） (昭)の才五師団に転属数梯団に分れ 「ケイ」島出発 ジャワにて終戦 参加せる主要なる依戦の概要（装備、戦斗、行軍、輸送） ケイ島にて各種輸送業務の他 現地自衛 作業の警備 戦斗には参加せず 終戦より帰還迄の行動の概要 昭南防犯の爲数梯団に分れしため、詳細不明なるも ケイ島出発者は死没等の事故なり

年月日	概 要
昭南「ジャワ」に到着せるは判明しあり 終戦後昭南にて下士官（三）入院 「レンパン」島移駐（十三） 昭南残前六（何れも概要）他 「ジャワ」にて終戦を迎え 其の中「ジャワ」にて 兵一 松田恵上等兵一 戦死 戦犯関係なし 「ゲ」に在りて部隊（特自三）は現地に オ五師団へ合流せしとの由にて 五師団主力「ゲ」より復員しあれば 残前者も復員終了と思考せらる	

特設自動車才十三中隊部隊略正

(勢 才一の四二七部隊)

年月日	概	要
昭一八五五	軍令陸甲才五〇五号により	
三	特設自動車才十三中隊の編成を命ぜられ	
二	「マライ州」ジヨノールバールに於て編成に着手	
七	同地に於て編成完結	
天	(日推定)	
	「バルマヘラ」島に転進のため	
	「シンガポール」港出帆	
五	(日推定)	
	「チャワ」島「ジヨン」ブリオック港に寄港	
	これより十一月十六日まで	
	「バルマヘラ」島の船なく「スラバヤ」にて輸送業務に従事	
二	「ジャワ」島「スラバヤ」港出帆「バルマヘラ」島に向ふ	
天		

年月日	概 要
昭 一 八 二 三	(日推定) 「ハルマヘラ」島「ワシレ」に上陸 尔後同地附近の輸送業務に従事す
自 一 八 二 六 至 一 九 六 四	下士官一、兵二 自動車監視のため「チヤワ」島「スラバヤ」に残留 其の後不祥
自 一 九 六 四 至 二 〇 八 五	下士官三、兵二「セレベス」島 特設自動車等二十八中隊に転属 下士官二、兵五 他隊に転属(部隊名不明) 以降 兵三、戦病死

独立自動車才ニ九〇中隊部隊略正

年月日	概	要
昭 六 五 一 五	部隊略正の概要	久留米才五十四部隊にて編成
二 七	動員完結	南方ハルマヘラ島出發命令を受く
九 八	門司港出港	途中ベラオ島に寄港
二	途中ベラオ島に寄港	ハルマヘラ島上陸
一 〇 二	ハルマヘラ島上陸	一部セレベス島に向出港
九 二 八	部隊全員集結	南方軍才ニ方面軍直轄兵站業務に服務
五 二	南方軍才ニ方面軍直轄兵站業務に服務	終戦後部隊及軍需品輸送実施
二 〇 八 一 五	終戦後部隊及軍需品輸送実施	セレベス島メケド港出港
二 五 五	セレベス島メケド港出港	田辺港に帰港復員
一 八	田辺港に帰港復員	

0452

年 月 日	昭和 六 五 五
要 約	編成地及年月日 福島県久苗米市外高良内 終戦より帰還迄の行動の概要 終戦当時各部隊の集結地に至る間の 部隊軍需品兵員輸送 毎日全軍需品を輸送計画に基き行動を実施す （トモホン地区よりゴロンタ口地区及トモホン地区より ビートン地区の輸送） 各部隊セレベス島のビートン地区に集結 後は各部隊の毎に自活農耕作業実施 各部隊共各一人宛畑一町部の開墾作業を目標に 山野の開墾に服し 其の向農作物を耕作収穫して自活す 五月二日頃集結地を出発 途中検問所三泊

年 月 日	
概 要	メナト集結 六日午前中より上船開始 夕刻出発 帰還の途につく 正代部隊長名 陸軍大尉 西田 吾 一

兵站自動車中百九十中隊部隊略正

年月日	概要
昭和三八三 至四八三	福岡県久留米市に於て 臨時編成完結 支那事変参加のため 内司港出發南支に出動 尔後南支佛印に転戦 引続き大東亞戦争勃発と共に泰國進入作戦 ビルマ攻畧作戦 尔後馬來、以姪、婆北地区に転進 該期間に於ける主なる作戦、警備、損耗左の如し 左記 広東攻畧作戦及同地附近の警備並輸送 広東に於て下士官一名負傷入院後送

至 三 四	自 九 五	至 二 八	自 九 四	至 九 三	自 六 七	至 一 四	自 三 七	至 九 七	自 八 五
海防に於て、兵一名負傷入院（後送）	海防附近の警備並輸送	那答殿に於て 将校一名戦死	仏印進駐作戦	カニ期	賓陽作戦及益寧附近警備並輸送 カニ期仏印国境作戦	牛府圩附近に於て 兵一名頭傷入院	翁英作戦	夏李作戦	

概 要

年月日		概 要
自 五 三 七	至 六 七 八	右第附近警備並輸送 右東に於て 兵一名負傷入院（後送）
自 リ 七 九	至 リ 三 〇	南部仙印進駐作戦 西貢附近警備並輸送 泰国進入作戦
自 七 一 八	至 七 一 五	泰国駐進並緬甸東突厥作戦
自 七 三 二	至 七 三 〇	ビルマカー次航空作戦 及「ラングーン」攻撃作戦 オニ次「ビルマ」航空作戦

年 月 日	概 要
自 モ 四 二	「マン」作戦
至 モ 五 六	「デローム」附近に於て
自 モ 五 元	矢一名負傷
至 モ 六 一〇	雨勢懸勢
自 モ 一〇 一	
至 モ 二 三〇	「マレイ」 同四地区航空重戦
自 ハ 一 五	
至 ハ 二 三〇	濠北地区に於ける作戦、準備並防犯
自 ハ 三 一	濠北地区防犯作戦
至 ハ 三 三	「バ」に於て
	矢戦死一名 矢三名負傷

至 一 九 一 一	自 一 一 一	年 月 日
濠北地区防犯才一号作戦		要

-437-

0459

患者輸才四十小隊部隊略証

(基才四八〇五部隊)

年月日	概	要
昭 天 二 五	陸軍大臣命令特煩編才十三号に依り 臨時編成下令	
自 天 二 三	患者輸送才四十小隊 編成完結	
至 二 三 八	宇都宮陸軍病院に於て 支那事変に関する勤務に従事	
自 二 三 八	宇都宮陸軍病院に於て	
至 二 三 三	大東亜戦役に関する勤務に従事 兎腎出発「シヤム」に向う	
モ 一 六	「シヤム」国盤谷に上陸	
天 三 三	大阪港出帆	

468

0460

ス
16
氏
アンボン

年月日		概 要
至	自	盤谷に在りて、オ百五兵站病院勤務援助 「シヤム國、ラーヘン」に在りて 同地リ盤谷間の患者輸送並に 通過部隊の患者診察及オ百五、オ百六兵站病院と 「ラーヘン」患者療養所の勤務援助 「ラーヘン」撤退 「シヤム」仏印国境「スパイダンテフ」通過 仏領西貢著 西貢に在りて オ二十三野戦防疫給水部の勤務援助 同地発 昭南島「シンガポール」着
〃	〃	
〃	〃	
〃	〃	
〃	〃	
至	自	盤谷に在りて、オ百五兵站病院勤務援助 「シヤム國、ラーヘン」に在りて 同地リ盤谷間の患者輸送並に 通過部隊の患者診察及オ百五、オ百六兵站病院と 「ラーヘン」患者療養所の勤務援助 「ラーヘン」撤退 「シヤム」仏印国境「スパイダンテフ」通過 仏領西貢著 西貢に在りて オ二十三野戦防疫給水部の勤務援助 同地発 昭南島「シンガポール」着
〃	〃	
〃	〃	
〃	〃	
〃	〃	

0461

年月日	概	要
昭六二〇	昭南島発	
リ	ジャワ島「ヤカルタ」上陸	
リ	「スラバヤ」発	
リ	「アンボイナ」島「アンボン」上陸	
自六二	「アンボン」に在りて患者輸送に任じ	
至五九	一部を以て	
	オ十九軍々医部医務室	
	野戦貨物廠臨時防疫結水班の業務援助	
リ	「アンボン」島「パン」出發	
リ	「セラム」島「ビル」に上陸 前任務続行	
五	現地復員同時に綏重兵オ五連隊	
二六、五	和歌山景田辺港帰着迄同隊に在りて勤務	
	正代部隊長名	
	陸軍少佐 篠原辰五郎	

- 440 -

0462

才十九軍患者輸送才五十七小隊部隊略正

年月日	概要
昭五 一(推定) 一(〃) 二(〃) 二(〃)	姫路野砲兵連隊補充隊に於て編成 宇品港出帆 ハルマヘラ島に向ふ マニラ寄港 ハラマヘラ島着 小隊は尔後ハルマヘラ島に在りて 島内各部隊と兵站病院間の患者輸送及 野戦兵站病院とフィリッピン・マニラ病院間の 患者輸送勤務に服す 尙小隊の一部は在ハルマヘラ島兵站病院の勤務に服す 付 小隊長 植田第二は 認可令紙付に転出し 伊藤弥蔵 転入交代す 小隊長以下大部は認可令紙を命ぜられ
二六〇	

年 月 日	概	要
	患者輸送才五十七小隊は解散を命ぜられる 関係書類は文司令部に引継ぐ 正代部隊長名 人 陸軍中尉 植田 弟二 少佐 伊藤 弥蔵	

患者輸送才六十六小队部隊略正

(剛堅勢 六七五八部隊)

年月日	概 要
昭和六十七 二 七	患者輸送才六十六小隊の編成を命ぜられ 野戦重砲才五連隊の(小倉)に於て 編成に着手(命令番号不詳)
二 三	同隊に於て編成完結
七 五	門司港出帆 パラオに向ふ
八 五	パラオ上陸 パラオ本島に於て待期す
二 三	パラオ出帆
一 三	門司港經由シンガポールに向ふ (此の頃才十九單の襲下に入る 日附不詳)
一 五	門司港寄港
一 四	台湾高尾港寄港 シンガポールに上陸

年月日	概	要
昭 二六 三 二八	シンガポール出帆	バタビヤに向ふ
二九 一 二	バタビヤ上陸	
二 四	バタビヤ出発	
五	汽車便にてスラバヤに向ふ	
五	スラバヤ到着	
三 一 五	西都ニユーギニアアマノクワリに向はんとせしも 船便社絶出発不能となる	
三 一 五	スラバヤより再びバタビヤに引き返す	
四 一 七	バタビヤ到着	
四 四	バタビヤ出帆	マニラ經由ニユーギニアに向ふ
二 二	シンガポール上陸	
二 七	シンガポール出帆	
五 一	仏印サイゴン上陸	
五 五	サイゴン出帆	マニラに向ふ
七 三 一	マニラ上陸	
七 三 一	セレベス島ヒートン上陸戦況によりニューギニア進発不能となる	

-444-

0466

年月日	概 要
昭 五 七 三 ハ 三	マニラ出張 ハルマヘラ経由 西部ニューギニア、ソロンに向はんとす オニ方面軍(總司令)部兵部隊に代用され 隊員はブイド、トモホン、カワンコワンなどに分駐 他部員と共に 兵站病院及び其の分院或は防護隊などの要員となる。 分散せる隊員はメイドに集結 南部セレベスバレパレに向ふ 現地(南セレベス)に於て 復員完結し 隊員はニューギニアより転進し来れる オニ軍の隷下に入り 各往生機関などに分散配属さる。 和歌山県田辺港に旧隊員の殆んど全部上陸せるものと推定す

ス
グ
フ
ア
ン
ト
ン

年 月 日	概 要
	尚六月三、四日頃、復員船符期中 バレバレ港に於て 下士官一、賊病死す 正代前隊長名 陸軍大尉 恵谷 仙之助

才一特設水路輸送隊部隊略正

(通称番号) 第一〇四三六

部隊長官氏名 予備役騎兵科陸士二八期

陸軍少佐 中村 泰

年月日	概 要
昭 六 四 二 三 五 三 〇	陸軍機密才ニ一号により 才三十一才三十二所用より兵力を 仏印「サイゴン」に於て編成す 兵出身地 茨城県 栃木 埼玉 群馬 長野 富山

年月日	概 要
昭 六 七 四	石川景 福井県 在務は東部「ニューギニア」に於て輸送業務に従事 昭南島に於て 南方総司令部より兵補を受領す 昭南島出航途中
八 二 六	瓜哇「ジャカルタ」寄港上陸 瓜哇島「スラバヤ」港出港
一 九 三 三 三 五	ロンボック海峡に於て 対潜水艦戦斗に於て輸送船沈没 部隊長以下三八名戦死
自 五 八 より 至 三 四 三 〇	瓜哇「テタール」商海上輸送業務に従事 解散 同日、オランダ軍団に編入

才十九軍獨立工兵才三連隊部隊略正

隊長 河野通義

年月日	概	要
昭三〇三	動員下令	
三	動員完結	
二七	支那華僑参加の局	
神戸港出発		
中支に出動 大東亜戦争勃発と共に		
比島小哇に参戦		
尔後臺北地区に参進該期間に於ける		
主なる任務警備左の如し		
左記		
南京攻堅戦		
杭州		

年月日	概	要
自西五〇	新門市附近交通作業	
至六四		
自〃〃五	瑞昌	
至八五		
自〃〃〇	競湘會戰	
至〃〃五		
自〃〃天	才二次瑞昌附近交通作業	
至五二〇		
自〃〃二	孝感—花園道の構築	
至四六		
自〃〃元	宜昌作戰	
至七三		
自〃〃八	河宕鎮附近交通作業	
至二〇		

年 月 日	概 要	至	自	至	自	至	自	至	自	至	自	至	自
五 三 一	当陽附近交通作業	天 一 二	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
三 一	予南作戦	三 一	三 七	二 〇	一 〇	七 六	六 六	七 五	七 五	三 一	三 一	三 一	三 一
	才二次当陽附近交通作業												
	長沙作戦												
	長沙作戦後の整備並教育												
	比島攻略戦準備												
	比島攻略戦												

年月日												概 要
至	自	至	自	至	自	至	自	至	自	至	自	
天	〃	〃	ハ	〃	〇	〃	〃	天	〃	ハ	〇	
四	三	二	ハ	ハ	一	三	〃	天	〃	四	三	
〇	一	〇	四	四	一	三	モ	五	五	一	一	
「ケ」 群島防行作戦 「フ」 島防行作戦 「ユ」 島軍進作戦 濠北地区防行作戦 「タ」 ニンバル諸島に於ける作戦 準備並防行 「セ」 ラム島防行作戦												

年月日		概 要
自 五 一	至 三 一	「セラム」島専進作戦
自 一 一	至 六 一	婆羅洲地区防犯作戦
自 三 一	至 三 一	「ゲ」群島に於て 野砲兵才五連隊に車馬 田辺海上陸 復員完結す 中蔵の行動略正 「テラチャソ」港周辺汽船引揚作戦 泰緬直接鉄道補強並に運管に伴う泰緬線併行自動車道構築作業 盤谷周辺水路中継輸送

年 月 日				概 要			
				正代連隊長 大佐 山田 茂 大佐 半田 伊之助 中佐 津島 吾己郎 中佐 河野 通義			
連隊事務精通者							
住所				陸軍大尉 西本 嘉夫			
住所				陸軍准尉 村山 一			

ヲ二十八野戦防疫給水部部隊略正

陸軍軍医中佐 戸田 賢
通称番号 牌六〇六六

年月日	概	要
昭和二十八年一月三十一日	位置 終戦時 ハルマヘラ島 戦後 下旬 大阪陸軍病院長編成担任官となり、大阪に於て編成完結迄 大阪出發 内司乗船 ハルマヘラ島「スバイム」に上陸一部（約4分の1）はセレベスに 分遣、主力は「ハルマヘラ」島に位置し南設勤務 現地復帰	

-157-

0479

年月日	
概要	要
編成地	大 隊 矢出身地 大坂管区 備 成 長以下三九六名 装 備 軽兵衛水城甲大台 自動車五台、自動銃車三十二台 指揮隊屋岡原 遠北次遣軍直取 受 遣 十九年八月、現地復帰の際、セレベス分遣隊は写真に「ハルマヘラ」駐屯部隊は、オモニニ師団に転属

-250-

0480

年 月 日	概 要
終戦より帰還迄の行動概要 南方ハルマヘラ島にて防疫給水業務に服す。	

終戦より帰還迄の行動概要

南方ハルマヘラ島にて防務給水業務に服す。

才ニ防疫給水部部隊略正

年月日	要
昭三 八 一 四	部隊の編成を完結し、同二十八日故国を出発。同月三十日江蘇省上海に上陸。オ一步を印してより中支南東州南支北印中央馬來「ジャ」ヲ、遼北終戦、復員完結に至る約ハリ年間に於ける主なる作戦（警備）並損耗人員左の如し
三 八 一 四	編成完結 上海上陸
自 九 三 〇	漢口攻堅並に警備
自 一 一 一	信陽作戦並に警備
至 八 三 一	南東州に転進準備
自 九 一 〇	南東州に於ける集結並に次期作戦準備

0482

至	自	至	自							至	自	至	自	至	自
三 一〇	三 一	二 三	九 元	九 二	九 六	九 六	九 五	二 一	二 一	二 五	三 〇	三 〇	二 七	三 六	一〇 六
上海上陸			北部山印警備並に中支へ転進	山印国境通過	山印作戰参加	南寧警備山印国境作戰並に昆龍道路作戰參加	韶陽作戰並に警備				南寧附近警備			南寧攻略作戰參加	

年月日	概要	要
自昭五 至天	上海附近次期作戦準備	
三 四 五	浙東上陸作戦参加	
四 五 六	浙東作戦並浙東地区掃蕩戦参加	
六 七 八	浙東地区の警備並修正工作	
六 七 八	上海附近に於ける教育訓練	
五 六 七	輸送業務	
二 三 四	北部島嶼攻略作戦参加	

年月日	概要	要
自昭六 三 一	臺北地区に於ける防犯作戦	
一九 三 三		
二〇 一 一	臺北地区防犯才一号作戦	
八 一 四		
八 二 五	自活作業並に復員待機	
二 六 五	部隊の一部復員（名古屋	
六 一 三	部隊の一部復員（田 辺）	
大 三	正代部隊長	
	陸軍軍医少佐 渡 辺 陸奥男	
	大尉 高 橋 輝 雄	
	少佐 八 幡 一 良	
	少佐 森 本 宏	

0486

特設陸上勤務第十一中隊

年月日	概	要
昭和六三 一五 一〇	特設陸上勤務第十一中隊の編成を命ぜられ「ジャワ島」「バンドン市」 独立混成隊五十大隊に於て編成に着手 編成完結	
至自 五六 三六 一五	任地に於て「スラバヤ港」出帆 中隊主力「アンボリナ」島「アンボン」上陸 一ヶ小隊「チモール」島「ラウティン」上陸	
至自 五六 一〇 一〇	中隊主力「アンボリナ」島「アンボン」に於て同地附近の警備及輸送 「チモール」島米道小隊は同島「ラウティン」地区の警備及び輸送 此の期間に於ける死傷者 将校一戦病死 兵一戦死 中隊主力「アンボン」島「ピル」に転進を命ぜられ以米同区附近の警備及び 輸送	

年月日	概 要
昭三三	「チモール」派遣小隊將校以下十名特設陸上勤務才十一中隊に転属を命ぜらる
五	在「セラム」島中政主力南方軍命令により現地復帰を命ぜられ、全費「輸重兵才五連隊」に転属、尔来同地附近の警備及び輸送
ハ三	作戦任務解除さる。此期間の死傷者、公病死下士官一
三三	「セラム」島「水アモアル」半島に集結を命ぜられ、終戦処理業務並現地自若
二五	同島「ウエサラ」地区転進
六四	復員のため「ウエサラ」出帆
六六	復員完結

正代部隊長

陸軍大尉

杉 本

定